

称号及び氏名 博士（言語文化学） 妹尾 恵里

学位授与の日付 2023年3月31日

論文名 日本中世における名器伝承の研究 ―名笛説話を中心に―

論文審査委員 主査 青木 賜鶴子

副査 西田 正宏

副査 山東 功

## 論文要旨

本論文は、日本中世における名器伝承を論じたものである。本論文で扱う「名器」とは、宮中の宝物もしくは楽家の名物として、特に固有名を書物に記される楽器である。ここでいう楽器とは、日本の中古中世において、特に宮中や寺院等で行われた舞楽管絃に使用された楽器横笛・笙・箏・篳篥・琵琶・箏・和琴・鞆鼓・鉦鼓・大太鼓等を指す。今日で言うところの、いわゆる「雅楽」に使用される楽器に相当する。これらの名器にまつわる由来や逸話などを「名器伝承」を呼ぶこととする。

名器伝承のうち、本論文では、主に横笛説話に注目し、様々な位相にある伝承を取り上げ、同話や類話、周辺資料などと比較検討することで、それぞれの伝承を必要とする意図や名器伝承の中での位置付け、名器伝承全体の意義を考察する。構成は次の二部五章に序論・結語を加えた。

序論では、本論文において扱う対象となる名器伝承がどのようなものを指すのか、改めて定義し、関連分野の近年までの研究状況を整理した。また、本論文の目的等を述べた。第一部「宮中の御物とされた名器」では、『枕草子』においてすでに宮中の名器として挙げられる、横笛「葉二」「水龍」について取り上げた。この二つの横笛は、宮中の名器であったことをはじめ、院政期以降の書物に靈異譚が記され、「宇治の宝蔵」に納められたとされることなど、共通点も多い。しかし、「葉二」は靈異譚と別に命名由来譚を持つが、「水龍」は靈異譚が即ち命名由来譚となっており、それぞれの伝承の位相は異なるようであるため、それぞれ検討した。また、これらの伝承の展開の一例として、横笛「青葉」の伝承についても論じた。

第一章「横笛「葉二」伝承と撰関家」では、横笛「葉二」の伝承を取り上げた。源博雅が鬼と笛を交換する話と、浄蔵が鬼の感応を得た話、天皇が蔵人を介して「入道殿」から笛を召し上げようとした話、笛に葉が二枚ついていたという命名由来の説話である。この説話は、『江談抄』『十訓抄』など、音楽に特化しない書物に、天皇や撰関家との関わりを示す伝承

が記されることが特徴的であった。そこで、伝承の諸相を改めて概観・整理して考察し、霊異や、王権・撰関家との関りを語る説話が付随することで、名器として権威付けられたものであり、名器伝承の型の一つであると結論づけた。「葉二」は、実体と名が先にあって、そこに説話が付随したものであった。また、「宇治の経蔵（宝蔵）」に納められたとされることは、実体が失われたとしても、言説の世界で永遠化・特権化される効果があったことを確認した。

第二章「横笛「水龍」伝承の位相」では、『古事談』等に記される、「水龍」の由來說話を取り上げた。すなわち「唐人が本朝に渡る際、航海に支障をきたしたので海の龍神に笛を捧げて難を逃れたが、後に、商売で儲けた千両を龍神に捧げて笛を取り戻す。その笛を本朝の貴人が買い取る」という説話である。最終的には「宇治の宝蔵」に収められたとされる。「水龍」の由來說話は、「海神に供物を捧げ、海を鎮めて無事に航海した」という話型を取り入れながらも「金千両で龍神から取り戻す」という点や、演奏場面が記されない点が特徴的であった。そこで、「水龍」説話を構成する要素について検討した。「水龍」という名の実在の横笛が先にあって、龍神に求められた説話が後に付加されたものであること、演奏場面を伴わないことで、笛の価値を高めるという単一の目的のために構成された説話であることを結論とした。

第三章「実体への意識が失われた名器伝承のゆくえー「青竹」「葉二」から横笛「青葉」伝承へー」では、横笛「青葉」の伝承を取り上げた。「青葉」の名は『枕草子』や『江談抄』には見られず、『続教訓抄』では「葉二」や「青竹」の別名として記された。しかし近世以降に「青葉」は、『平家物語』では「小枝」等であったはずの敦盛の笛として知られるようになる。『十訓抄』の諸本等から、「青葉」は「青竹、葉二」と列挙される資料からの誤脱によって生成された名であり、名のみの実体のない名器であったことを指摘した。『枕草子』で名器に数えられた宝物たちの中には早くに実体を失ったものもあつたらしいことから、実体を失った名器の名が後世に混同され、名のみ全く別の名器として伝承され、虚構を含むような伝承の中に取り込まれて伝えられる場合があつたことを考察した。

第二部「楽人たちと『続教訓抄』に記された名器」では、楽人たちとゆかりの深い名器について考察した。『枕草子』や『江談抄』に記される名器は、宮中の宝物、もしくは貴顕が所有するものであった。『続教訓抄』『體源抄』では、このような名器に続けて、先行する書物には見られない名器が多数記されている。楽人の手に成る楽書において記される名器は、楽家の宝物であり、楽人の愛用の楽器であつたと考えられ、第一部で取り上げた宮中の宝物とは位置付けが異なる。そしてそれは、付随する説話の傾向にも影響するものと考えられる。このような名器のうちには、名手と謳われるような楽人の逸話とともに伝えられるものがある。『続教訓抄』に記される説話として、楽人の霊異によって名器となる「海賊丸」と、貴顕に求められるが楽人が断る「大丸」「虎丸」「下腰丸」を取り上げた。『続教訓抄』の意図を視野に入れつつ、それぞれの説話の位相を検討した。

第一章「筆筭「海賊丸」説話の諸相」では、筆筭「海賊丸」の伝承を取り上げた。和邇部

用光が、箏篋の演奏によって海賊の難を逃れたという説話である。「海賊丸」説話は様々な書物に同話が採られ、人口に膾炙していたものと考えられるが、特に『続教訓鈔』が、説話の細部が異なる種々の同話を網羅的に併記している点が特異であった。この点に注目して、同話の諸相を確認しつつ、『続教訓鈔』の意図を考察した。『今鏡』等の、比較的早い時期の記録では、箏篋に名があるかどうかについては記されないことから、本話の原型は用光という音楽の名人による、芸道感応説話と呼べるものであったと考えられる。それが、地下楽人達の手になる楽書類に伝承される過程で、名器の命名由来説話の性格を帯びるようになった。また、本話は伝承される中で「秘曲」の要素が付加されたことを改めて指摘し、『続教訓鈔』の同話の併記には、地下楽人の立場の正当性の主張のために、楽人と名器とを結びつけた説話を数多く収集しようとする意図があったと結論づけた。

第二章では、「横笛」「大丸」「虎丸」「下腰丸」説話の背景として、狛朝葛による楽書『続教訓鈔』における横笛伝承を対象とし、貴顕に求められる横笛の説話に注目した。『続教訓鈔』の横笛伝承には、天皇や上皇の手に渡るなど、貴顕との結びつきが語るものが目立つ。その中で、「大丸」「虎丸」「下腰丸」の伝承は、橘俊綱が強引に笛を召し上げようとして失敗に終わるといった内容が特徴的であった。これらの伝承の登場人物の人間関係等、説話の構成要素を確認し、上位者に価値を認められるという点で位相を同じくすることを指摘した。また、上位者から価値を認められたとしても大切な笛をそう簡単に手放さないという点には楽人の矜持が示され、楽人の手に成る楽書に記される名器伝承の中で必要な要素であったことを結論とした。

以上の五つの事例の考察から、結語では、本論文を総括し、王権を莊嚴するものと楽人の立場の正当性を主張するものの二系統に分けられるという名器伝承の性質を指摘した。また、宮中の宝物の名のユニークさから命名由来説話が求められたことを契機に生み出され、音楽の家の確立とともに楽人の矜持を支えるものとして広がりをもせたという展開の様相を概観した。

## 初出一覧

序論 新稿。

### 第一部 宮中の御物とされた名器

#### 第一章 横笛「葉二」伝承と撰関家

「横笛「葉二」伝承考」(『言語文化学研究 日本語日本文学編』17号、2022年3月)。

#### 第二章 横笛「水龍」伝承の位相

「横笛「水龍」説話考—龍神から取り戻した笛—」(『言語文化学研究 日本語日本文学編』18号、2023年3月)。

#### 第三章 実体への意識が失われた名器伝承のゆくえ

—「青竹」「葉二」から横笛「青葉」伝承へ—

「横笛「青葉」伝承の生成と流布」(『日本語日本文学論叢』13号、2018年2月)。

### 第二部 楽人たちと『続教訓鈔』に記された名器

#### 第一章 箏「海賊丸」説話の諸相

「箏「海賊丸」説話の諸相—『続教訓鈔』所載名器伝承の一考察—」(『言語文化学研究 日本語日本文学編』16号、2021年3月)。

#### 第二章 横笛「大丸」「虎丸」「下腰丸」説話の背景

「『続教訓鈔』における横笛伝承—「大丸」「虎丸」「下腰丸」説話の背景—」(『百舌鳥国文』30号、2021年3月)。

結語 新稿。

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

言語文化学分野の論文審査基準に従って、審査結果を述べる。

### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、日本中世の楽書・説話集・類書その他の文献に載る、雅楽楽器の逸物「名器」に関わる伝承を論じたものである。考察対象は吹奏楽器、中でも「龍笛」とも称された「横笛」に絞られ、「箏」に関わる伝承への論考一篇を加える。資料上、名のある楽器への言及は、平安期の『枕草子』や院政期の『江談抄』にみえるが、その説話的展開は、『十訓抄』・『古今著聞集』等の説話集や、『教訓抄』『続教訓抄』以下の楽書といった中世の資料に顕著となる。かかる状況を概観・網羅的に捉えた上で、本論文は、「名器」伝承を二大別し、第一部・第二部で委細に論じている

第一部は、宮中所蔵の御物あるいは撰関家の宝物とされた名笛「葉二」「水龍」の伝承を、諸資料を博搜して比較検討し、説話生成と伝承の意味を考察している。結果、既に存在する所与の宝物としての「名器」が、伝承の過程で異界との交錯によって、より神秘化・特権化される過程が明らかにされる。加えて、「葉二」伝承との交錯から、平敦盛所持の名笛「青葉」の笛が構想され、喧伝していく過程を論じた論考を付す。

第二部は、王朝貴族社会において比較的低位の専門楽人たちが、日常所持し演奏に供した楽器が、「名器」化していく過程を解き明かす。宝物としての名笛が先にあるとあって、説話が後から付随する第一部の事例と異なり、ここでは説話が先にあるとあって、後から話中の楽器が名器として生成し、伝承されていくという事例を考察する。その過程で、自己の流派や家柄を他と差異化する意識が、伝承の基層に存する可能性を論じる。

以上、本論文は論述に必要な資料を適切に取捨選択し、二系列の名器伝承の存在を明確化するなど、論文標題に即した研究テーマが十分に絞り込まれたものと言える。

### 2) 研究の方法論が明確である。

広く脱領域的知見が求められる説話研究において、とりわけ本論文のように音楽伝承を対象とするものは、楽書はもとより古記録・故実書等、多ジャンルに及ぶ文献への目配りが必須となる。この点本論文は、先行研究に学び資料を博搜し、対象となるテキストを丁寧に比較対照し、その差異の意味について実証的に考察を加えている。これは、説話・説話集研究が定式化してきた正統的研究方法であり、そのことへの自覚は論中に明確なものが看取される。

### 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

本論文でしばしば援用される『続教訓抄』や『愚問記』等の中世楽書は、索引や注釈書等も備わず、その全貌を知るのは容易ではない。そんな中で本論文は、「序論」に明らかなように、よく「近年までの研究状況」を踏まえ、先学の論考に導かれつつ、必要なテキスト・先行研究を網羅的に披見して立論に備えている。個々の資料の影響関係や、執筆者の伝記的事実や社会的位相についても、先行研究の成果を理解して、論述の基礎的知見としている。

また、具体的な立論過程において、広く戦後の説話研究が構築した正統的研究方法によりつつ、周辺諸学の成果に学びながら、テキストに即した考察をはかっている。

### 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

第一部では、『枕草子』に名のみ記される名器「葉二」「水龍」について、中世の説話集や楽書・類書等に載る記事を博搜し、綿密な比較対照の上で伝承の系統を可視化、個々のテキストの含意を考察している。散逸資料等、未見の文献の存在があり得たとしても、現状においてその読解は、十分にテキストに即したものとして論理的で説得力を持つ。

第二部第一章では、「海賊丸」伝承の全体を通観し、早い時期の資料には楽器の名前が特記されないことを実証的に示し、「名器」が後代に実体化される過程をよく究明し得ている。第二章では、「橘俊綱」等の登場人物の歴史的人物像について、周辺資料を参照しつつ明確化し、個々の説話が持つ説得力・史実らしさの生成を、実証的に論じ得ている。

### 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

名器伝承をその一部とする音楽説話の研究は、近時論考が輩出し焦点化しつつあるが、未だ説き尽くされた状況にはほど遠いものがある。『十訓抄』や『古今著聞集』といった知られた説話集はともかく、この分野の研究の基礎的文献ともなる楽書類は、テキストの整備や注釈作業も不十分で、今後多くの課題を抱える。そんな中、名器伝承とりわけ名笛に関わる説話の考察にテーマを絞り、幾つかの具体的事例を掲げて考察を試みた本論文は、現況において一定の独創性を主張し得ることは間違いない。

ただ、これら本論文中の諸論と同等の研究は、名の伝わる名器の数だけ成り立つ可能性もあって、それら個別の名器への論及を積み重ねることには、自ずと研究上の限界があるのも事実である。今後は、本論文の達成を踏まえて、より高次の視点からする総括的で包括的な、音楽説話研究総体への提言を含む論及が望まれる。本論文の持つ正統性・独創性を認めた上で、今回の成果をひとつび対象化した上で、この先に見えてくるはずのものへの論も期待したい。当該分野研究進展への貢献は、自ずと本論文執筆者の今後にも求められると考える。

以上を総合して、本論文は、博士学位論文として必要十分な内容を備えており、博士(言語文化学)の学位を授与するに値するものであると審査委員会は判断した。